

第3期札幌文化芸術円卓会議
第7回会議

会 議 録

日 時：平成27年1月13日（火）午後6時開会
場 所：札幌市役所本庁舎 地下2階 2号会議室

1. 開 会

○事務局（加茂市民文化課長） それでは、6時になりましたので、始めたいと思います。まず、新年になりまして、最初の会議でございます。

改めまして、皆様、新年明けましておめでとうございます。今年もどうぞよろしく願ひいたします。

また、本日も、大変お忙しい中をお集まりいただきまして、まことにありがとうございます。

ただ今より、第3期札幌文化芸術円卓会議の第7回目を開催いたします。

前回の会議でもご連絡いたしましたとおり、ご議論いただくのは本日の会議で最後となります。次回は、2月に市長に活動報告を行うこととなります。本日は、委員の皆様への思いの丈を出し尽くしていただければと考えております。私も、北村委員長のたたき台を拝見させていただきまして、自分の中でもやもやしていたところが明確に解説してありまして、大変参考になりました。皆さんからいろいろとご意見を出していただきながら、最終版を策定していただければと思います。

それでは、北村委員長、南副委員長、どうぞよろしく願ひいたします。

2. 議 事

○北村委員長 皆さん、どうも明けましておめでとうございます。今年もよろしく願ひします。

私は、年末に拙い文章を書いて、余り満足していませんが、とにかく出さなければいけなかったもので、出しました。これはたたき台ですので、どんどん叩いていただいてほこりを出して鍛えていただければよろしいので、今日はそれをお願いします。

年末のお忙しいときに皆さんに見ていただいたので、ご意見をいただいた方といただいていない方といろいろありますけれども、今日、改めて見ていただいて、ここはどうか、ああだ、こうだということを言っていただいて、最終的に市長に出す報告書を確定するというのが今日の仕事です。

私の文章に対して、特に清水委員にたくさん添削していただきましたので、まず、清水委員に赤を入れていただいた考え方をお伺いして、それを踏まえて皆さんの意見を伺えればと思います。

まず、清水委員から願ひできますでしょうか。

○清水委員 清水です。

本当にダッシュで書いたもので、言葉が荒い感じになってしまって、委員長には申しわけないと感じております。

私が文章を直すのもおかしいですけれども、こういう風にと意見するならと思って書いたのは、読んでいただければわかると思います。逆に、質問とか、そうではないという意見をどんどん言ってもらえたらと思います。

○南副委員長 清水委員が書いてくださった中から、文言的な問題と、ここでもう少しディスカッションが必要ではないかと考えになっている部分と、複数あると思います。その中で、このことは文言だから後回しにしても、この部分はもう少し意見を詰めたほうが良いということ、今、積極的に語っていただいたほうが良いと思います。

○清水委員 わかりました。

では、文言的なものはそんなになくて、文章のトーンの問題で、単なる私の好みです。何となく市役所の方へのメッセージ的な文章をすごく大幅に削除してしまって申しわけないですが、市で出すものなので、手前味噌のような感じになってしまうかなと思いました。ですから、そんなに市役所、市役所と言わないで、一般に向けてという感じのトーンにしたほうが、ほかの人が見て人ごとに思わないかなと思ったので、そんな感じで直しました。

議論したほうが良いかなと思ったのは、後ろにつけたものです。やはり、まだ全員の共通認識になっていないかもしれない芸術とかアート、クリエイティビティーという単語が何を指すのか、ばらばら出てきてしまうかなという気がしたのです。

私が最後のページの「全体を通して」で書いたところですが、芸術と芸術文化と文化芸術とアートと創造性、クリエイティビティーといろいろ出てくるのですけれども、どういう意図で使っているかが読み手にわかりやすいように、先に配られた花ひらくの資料では、ページごとに、この単語はこういう意味ですという脚注があったので、そういうものをつけたほうが良いかなと思いました。

また、もう少し議論したほうが良いかなと思ったのは、ブランド化のために何をしたらいいかは結構難しいと思いますので、どう言うかということと、寛容性についての言及もどういう風に落とし込むかについて、もう一回議論したらどうかと思った次第です。

以上です。

○北村委員長 ありがとうございます。

一つ目の誰に向けた文章なのかというのは、おっしゃるとおり市民に向けたメッセージだということで、全部直したほうが良いと思います。

もう一点は、2ページのところで、リベラル・アーツのことですが、清水委員、どうしましょうか。

○清水委員 これも、結構唐突に言っていますね。

まず、リベラル・アーツの認識も、私の認識が一般的なのか、ちょっと怪しいような気がするのですけれども、リベラル・アーツは古代ギリシャなのでしょう。

○北村委員長 中世ヨーロッパで、特に神学を専門にやる前に7科目ありまして、4科と3科のうち3科が今で言うところの文科系の学問です。4科が天文学と音楽と幾何と代数、3科は論理学と文学と文法をやります。

僕のところにもよく間違った手紙が来るのですけれども、北海道大学のリベラル・アーツ宛てに来ると、アーツだから芸術だろうと思って僕のところに来るのですけれども、封筒の中身をあけてみると化学の学会がありますという案内だったりするのです。リベラル・

アーツ、現代の大学でいうと、いわゆる一般教養という科目になります。

ただ、アーツの語源というか、語釈を入れるかどうか、あるいは、私たちはリベラル・アーツとしてアートのことを市民的な教養で身につけるべきだということを言えるかどうかだろうと思います。

○清水委員 そうですね。ここで、リベラル・アーツという話をしたのは、委員長がアートという単語を使っているところは、芸術、芸術文化というものよりももう少し広い意味を含ませたいということで、アートという言い方をされていたと思うのです。リベラル・アーツのアーツも、ちょっと難しいですが、英語のアートの語義が広いというような言い方になるのでしょうか。

結局、札幌が創造都市ということで文化的なまちに行っていて、クリエイティブクラスでもないけれども、創造都市の市民としてはアートの芸術、すべが現代で言うリベラル・アーツみたいなものということですね。中世のリベラル・アーツは神学のものですけれども、私が考えるのは、今の現代社会でのリベラル・アーツは、例えば、アートというものをうまく日常生活に取り入れる力だったり、空気を読む力とか、そういうコミュニケーション能力といった、近代で必要とされる素養と、今の素養はちょっと変わってきていると思うので、そういった意味で書いてみました。

○北村委員長 ありがとうございます。

南副委員長、何かありますか。

○南副委員長 リベラル・アーツという用語と、その後の芸術、アートという言葉が紛らわしいということなのではないかと思いますが、そうでもないのですか。

○清水委員 そうですね。

○南副委員長 リベラル・アーツというと、例えば日本語だと学芸という言い方にする方法もありますね。要するに、芸術というよりは、むしろ学芸といった要素のほうがリベラル・アーツという言葉には強いです。

○清水委員 教養や素養というようなことですね。

○南副委員長 その後、アートという言葉で言いかえたものと芸術という言葉が出てきます。だから、リベラル・アーツと突然出てきたときに、それが何を指すか、一瞬、戸惑ってしまうことに対する話なわけで、もしそういうことであるならば、清水委員がおっしゃるとおり、リベラル・アーツという言葉が出てきたとしたら、その下に脚注をつけるのは親切なやり方だと思います。

○北村委員長 ほかに何かありますか。

では、今の問題も含めて、全体を通して何かご意見があればお願いします。

あとは、清水委員から、せっかく石川委員にメディアとしてのコンシェルジュのことをまとめていただいたので、そのことをもう少し積極的に引用したらどうかというご意見だったかと思います。

○清水委員 石川委員の文章をどう引用するかというところまでできませんでした。でも、

せっかくメディアとしてのということで、コンシェルジュをいろいろまとめてくださったので、引用できる部分はもっと生かしていったらどうかと思いました。

○北村委員長 その点について、石川委員はどうですか。私の文章をもっとここに入れてほしいということはありませんか。

○石川委員 委員長につくってもらったものでも、言っていることはそんなに変わらないような気がします。ただ、そこに僕のを複合するように入れ込むことはすごく難しくなってしまうような印象があります。

○北村委員長 単純に入れるだけではなくて、ここをこうしたほうがいいのか、北村はここを誤解しているというところがもしあればお願いします。

○石川委員 私も読ませてもらって、全体的な文脈から考えると、こういう書き方になるのではないかと思います。私が割とこだわってきたことは、有機的な組織体ということを書かせていただいたと思いますけれども、編集から営業までアートに関するさまざまなことに関与できる有機的な組織が触れられると嬉しいかなという感じがします。今の段階ではこれぐらいしか言えません。

あとは、次のページにあります、組織構成としてアートセンターの一つの機能として持つというのは、私もそれでいいと思います。ただ、アートセンターだけにあるというよりも、それに関する関係者が札幌の芸術に関するいろいろな組織にちょこちょこいてもいいのではないかなというところがあります。それぐらいかと思います。

○北村委員長 では、7ページのところのコンシェルジュの組織は、もう少し実体的な人の固まりというよりも、もう少し広がりを持ったネットワーク的な性格を持っているということですね。

○石川委員 そうですね。札幌のアートに関する組織といろいろつなげてネットワークしていく、ほかの札幌の芸術関係の組織に担当者みたいな人がいるような感じがあたりということですね。

あとは、今、つけ加えるとしたら、市民が直接質問できる媒体、組織みたいなところですね。市民がアートで疑問があったりアートについて知りたいときに一番コミットできる組織としてアートコンシェルジュ、市民の窓口としてのアートコンシェルジュもあっていいのではないかと思います。

済みません。7番の相談というところにありますので、今の発言は訂正します。ですから、私は、7番的な機能がすごく重要だと思っていて、市民がアートについてよくわからないなと思ったときに、アートについて何か質問したいときに、札幌市には質問できる場所がないと思います。そういったときに、アートとは何かとか、自分はこういうアートを味わいたいときにはどうすればいいとか、何かアートの企画をやりたいときにどうすればいいのかというときに手軽に相談できる組織というのは、やはりアートコンシェルジュの最大の機能だと思います。

同時に、メディアとして公的、私的な美術、札幌のアート関係の組織なり、アート関係

以外の組織にもネットワークを持ってコンシェルジュとして機能していくというところを私は強調したいです。

○北村委員長 ありがとうございます。

今、情報化社会と言われていますが、例えばフェイスブックというツールがこの先10年もつとは思いません。ツイッターも、LINEも、多分、10年後にはなくなっているでしょうし、そういうプラットフォームみたいなものはどんどん更新されていくだろうと思います。

プラットフォームが新しくなって、何が変わらないところかということ、情報をこういう人たちに送る送るの先のところを確保していくと、それをLINEでやるにしても、紙媒体で渡すにしても、ツイッターでやるにしても、とりあえず誰にやればいいのかというところはわかります。でも、これでしかやらないというふうに決めてしまうと、自由に身動きがとれなくなってしまうだろうなと思います。ですから、コンシェルジュという組織があるのはもちろんいいのですが、それを一体誰に向けてやるのか、受け手のところをちゃんと組織しておけば、あとはどうにでもなるような気がしなくもないです。

今、インターネットの活用とか情報の活用とか何といても、2年、3年すると、そういう話は色あせてしまうのかなという気もしました。

それは、私の勝手な考えですが、ほかに何かご意見がありましたらどうぞ。

○富田委員 まだ、ブランド化ということが議論されていないというお話もありましたけれども、僕が気になったのは、「はじめに」という言葉があって、議論の前提となるところで、産業化という言葉が出てきます。「『産業化』とは芸術なしには生活そのものが成り立たないことを示しているものだとも考えられます」というワンセンテンスがあります。ここに至る「私たちは日常的に誰でも芸術に接していることに気づいていないだけで」「気づいて」を「自覚していない」と直されていますが、ここが急で、理解するのが難しいのではないかと思います。産業化は、人間が生きる上で絶対に必要であるかという証明というか、結論がジャンプされているような形で、後に出てくるかもしれないですが、そこが難しかったかなということが一つあります。産業化という言葉とブランド化が一体どう違うのかということをもう少し説明しないと、説得力に欠けるのではないかと考えました。

あとは、これは創造都市という言い方になりますけれども、アーティストとして言うておくのもいいかなと思いますので、申し上げます。

こういうことは、もちろん市民の中にアーティストも入っていると思いますが、アーティストそのものがメディアになって活動することであるとか、そのように振る舞うことで、何かきっかけになるのではないかとということも考えられます。それから、もう少し未来を考えていく上で、僕は余りネガティブなことは言わないほうがいいと思いますが、どうしても気になってしまうのが、再三、言っていますけれども、アートの自律性というか、どんどん多様性を持っていく、寛容性を持っていくという開いている状況で、ファッション

的に言えばトレンドも変わっていくでしょうし、アートも変わっていく中で、では、何を軸にしていくのかがすごく重要です。それは、例えばディレクターを置くということもあるのですが、そこに寄り添いながらも、札幌というものをブランド化していく上でどういうものを軸とするのか、かなりがっちりやらないと難しいのではないかと思います。

アートというものが雪崩のようになって、何でもいいという世界にどんどんなっていくことを、僕としてはそこが見えないもやもやというものがあると思います。クオリティーをどう担保するかということがどうしても気になってしまうので、最後に結論めいたことではないですが、そこを共有しておきたいと思った次第です。

○南副委員長 僕の感覚としては、芸術の産業化は、ある意味で経済に組み入れられるというニュアンスだと思います。アートで出てきたものが産業化されると。しかし、我々が最初にそう言ったのは、産業の芸術化であって、産業に対して、産業だけのものではなくて、それがアートになるとプラスアルファということなのだというのが当初の話の中であつたと思います。産業が芸術化するとはどういうことかということ、その中にブランド化という考え方が一つあつたのではないかと思います。

では、ブランドはどういうふうになってつくられるかということ、これは、一つはアートというものに対して明確な視点があるということです。札幌市の中において明確な視点がある、こういう視点がある、こういうものであるからこういうブランドが成り立つものなわけであって、何となくもやもやしているものであれば、ブランドとしての特徴を持つことはできないわけです。札幌市として明確なものを持つ、それを札幌市として持つとはどういうことかということ、結局、市民がアートという概念に対してプライドを持つことが必要なわけです。そのプライドを持ったことによる明確な視点で、札幌ブランドというものが必要になってくると思います。その札幌ブランドができることによって、産業をアート化していくことができるのではないかという話だったと理解しておりました。

○北村委員長 ブランド化というものは、僕自身も書いていてもやもやして、最後は困ってサッポロスマイルをどこでもつければいいみたいな話になってしまったのです。でも、基本的には、ここであつた議論で、ブランド化とはどういうことかという議論は、札幌で一定の数のアーティストがちゃんと生活が成り立っていくようなまちにしないと、創造都市にしても、ブランド化にしても成り立たないのかなという気がします。

○富田委員 皆さんはどう考えているのかを聞いてみたかったです。産業化に対して、ブランド化という言葉が出てきたので、そこに関してどう思っているのか、お伺いしたいと思いました。

○北村委員長 尾崎委員、いかがですか。

○尾崎委員 今のブランド化、産業化は、1期目の会議で出てきたお話で、そのときの資料を読んだあたりからずっと思っていたことですが、それが果たしてどういったことなのかということは、まだまだ見えない部分があります。例えば、自分の中の希望みたいなものはもちろんありますし、富田委員のようなアーティスト側の人間、僕はどちらかという

とアーティストのそばにいる人間で、そうでない人たちとまた見方も違ってくると思います。それをここで議論する場でもないと思っていて、僕はどこかで考えることをやめてしまったのです。すごく難しいことですね。だから、そこを掘り下げていくところでもないのかなと思うところもあります。

あとは、全体の報告書に関してですけれども、一個一個文章を直すのはおこがましいなと思って、何も出さなかったのです。基本的には、会議の初めからの流れをまとめてありまして、僕は基本的に異論はないのですが、年末、正月と2回ぐらい読み返していて、思ったこととしては、3期目6年です。1期でそういった提言なりが出て、そこからすぐに札幌の芸術文化行政に大きな影響を与えるというものでもないのかなとすごく思っていたのです。

恐らく、ずっと続けていくであろうこの会議で、これによって大きく変わったということがないにしても、札幌市の中期計画の折には、こういった要望が拾われているというものがあると、僕らも2年間にわたって一生懸命考えてやりがいがあったと思いますし、これから先に委員になる方も同じように思うのではないかと思います。

○北村委員長 それは、円卓会議を6年間にわたって進めてきて、それをやったというアリバイだけではなくて、実効性をどれぐらい担保できるのか、市役所に投げ返すしかないですね。

ただ、第1期目の産業化の問題にしても、第2期目のアートセンターにしても、全くの夢物語ではなくて、四、五年前に出した産業とアートがどういうふうにかかわっていくのかという視点が、例えば、創造都市の問題になったりしていくでしょうし、それから、あと数年後には複合施設ができて、そこでアートセンターが機能するのかどうかわかりませんが、そういったことが必要だという必要性の認識は札幌市でも持っていてくれると思います。

私たち3期目はどういう提言書になるかわかりませんが、それが明日、明後日に実現するかどうかわかりませんが、3期目の方たちはこんなことを考えていたのかとどこかで参照されることに満足していいのかわかりませんが、やったことが無駄にならないようにしていただきたいと思います。その辺は、どうぞよろしく願いいたします。

鈴木委員、全体を通して何かあればお願いします。

○鈴木委員 とても勉強になる内容で、私は、内容に対してはこれでいいと思いました。

私は、学生だからできることは何かあるかなと思って、今まで札幌市のホームページに載っている議事録をなるべく見るようにいろいろな方に勧めていまして、今回いただいたものも何人かに見せたのです。そうしたら、4年生は、なるほどというふうに読んでいただいたのですけれども、1年生の子たちは、何かすごくいいことを言っているのはわかりますが、私たちにはまだわかりませんと言われてしまいました。もし可能なのであれば、札幌市に提出するのはこういう文章でも構わないのですが、ホームページに載せるときはもう一種類ぐらいあってもいいのかなと思いました。

○北村委員長 縮尺版か、要約版か、ポイントと押さえたような感じのものでしょうか。

○鈴木委員 そうですね。以前、石川委員につくっていただいたものは、芸術に関して余り詳しくない方でも読みやすいシンプルさがあったと思うので、そういうふうに、もう一種類、いろいろな人に読みやすいものをつくってもいいのかなと思いました。

○北村委員長 難しいですか。

○鈴木委員 それこそ、さっきおっしゃっていたリベラル・アーツについては、後輩からは、この横文字は何ですかと言われてしまったのです。確かに、これは混乱を招く言葉なのかもなと思いました。

○北村委員長 済みません、やはり不可ですね。

○富田委員 でも、清水委員が言ったように、これは市民に公開されることになるので、もちろん市民が読むことに関しては、清水委員がおっしゃっているようなことに僕は同意できます。やはりわからないと意味がないので、もちろん専門用語というか、アートをわかっている人たちが読まないものもあつたらというのは、それこそメディア的というか、これからやろうとしている寛容性や多様性につながっていくのかなと思います。そういう風に振る舞うことで、何か変わる可能性もありますね。

○北村委員長 難しさの理由は、言葉ですか、長さですか、それとも論理の展開ですか。

○鈴木委員 多分、清水委員の確認事項に入っていた文章から想像されるポップ絵や写真がないというのもあって、読む前から難しいものと思ってしまう子が多かったみたいです。横文字に関しては、ポストモダンという言葉さえも知らない子もたくさんいらっしゃると思ったので、それに関しては、注釈をつければすぐわかるので、大丈夫だと思います。ビジュアル面でわかりづらいというふうに、読む前から勝手に思ってしまう子もいたようです。

○北村委員長 ビジュアルの面について、考えるマクルーハンの絵とかですね。富田委員が才能を発揮してもらえないでしょうか。

○富田委員 ビジュアル的に難しい部分はもちろんあると思います。

○鈴木委員 それから、知り合いの話ばかりで申しわけないのですが、外国の音大に行っている子で、この議事録を4年間読んでいる子がいて、それがすごく感動的だったので。最近、札幌市は結構いろいろな取り組みが展開されていて、写真などがあつたほうが吸収しやすいと言われましたので、入れたほうがいいと思います。

○北村委員長 ビジュアル的な図をぜひ入れていただきたいのですが、私は描けないので、誰かに描いていただく話ですね。

○南副委員長 図をつくる前に、論理の進め方が難しいと思うのです。一つは、創造都市の実質化というのがメーンにあるわけですが。その実質化のポイントとして、まず一つはブランド化という言葉が出てきています。札幌としてブランドを持とうという話の一つありますね。そのブランドを持たせるためにはどうしたらいいのかという話の中で、寛容性のレッスンになるというような言い方をされているわけで、アートというものに対して芸術

というものがまちの中に浸透している、あるいは、自意識を持つことに対して私たちは寛容性というものが必要だという言い方で苦しいのでしょうか。

その進みの中で、二つ目のポイントとして、ブランド化のほかにインフラ整備をおっしゃっています。このインフラ整備とブランド化を通して実質化をつくり上げていこうということです。そのインフラ整備がアートコンシェルジュという機能だということになっているのでよろしいですか。

○富田委員 アートは日常に深く浸透しているというそのものが札幌のブランドであるとも言えなくもないということでしょうか。

○南副委員長 日常性という言葉とブランド化は完全にイコール化できるかということ、ブランド化していく上では日常化は必要なことなのだろうと思いますけれども、先ほど、ブランド化という問題について言ったときに、せめてアートが日常化になっていればブランドとして成立するかということ、そうではないという話をさっきしたわけで、その辺の整合性は必要なのかなと思っています。

○富田委員 わかりました。ありがとうございます。

○北村委員長 私が最初に優はとれないなと言ったのは、全く時間がない中でとにかく頭から書き始めて、どういう方向に行くのか、ずっと自分で方向が見定まらなかったのです。5ページ目の二つの提言に来て、ようやく方向を見つけました。これは、論文としては全くだめなわけで、最初にテーマを出して、それを敷衍するような形で、もう一回、ここに持ってこなければいけないのですけれども、僕は、「はじめに」のところで問題意識が十分なかったので、論理として非常に弱い文章になっていると思います。もし口頭試問のときに、僕が指導員であれば、君の問題の出発点はどこなのだと言います。

これは、私自身が一から百まで書かせてもらえるのだったら書けるのですけれども、やはり、皆さんのご意見があって、議論の経過があったので、それを書かないことにはと思うものがある、自分自身の意見だけでは成り立たなかったというところがあります。

○富田委員 これに、メディアアーツという概念が入ってくるので、さらに複雑になっていく気がします。

○南副委員長 私は、今回はメディアアーツにそんなに触れなくてよかったのではないかと思います。話の筋の中で、この文章の中では、創造性の問題についておっしゃっていて、創造都市さっぽろの実質化という点に帰着し、そのための具体的方策をさまざまに検討しました。それはどういうものなのかということで、二つの提言をぼんと言ってしまったほうが私としては読みやすいと思ったのです。

○富田委員 一つのあらわれというか、方法として、メディアアーツというものがあるという帰結ですか。

○南副委員長 今、ここでメディアアーツの問題点について触れられたことは困難になっていると思います。もし触れるのだったら、別の問題になってくるという気がします。

○北村委員長 そうですね。私が書いた4ページの後半はメディアアーツのことです。創

造都市さっぽろがメディアアーツの分野でネットワークに加盟しているということがあるので、それはちょっと触れたほうがいいかなということでした。

山田委員、全体を通して何かありますか。

○山田委員 これを読ませていただいて、最後に二つの提言があるものですから、私としては、そこをぼんと言って、あとの細かいところやわからないところは、あえて注釈をつけずに、読む方の想像力を働かせていただいたほうが、いろいろと考えていただける提言になるのではないかと思います。ですから、この辺はどうでしょうかというものはあえて上げませんでした。

ですから、先ほどもありましたリベラル・アーツのことや、それぞれの文言で、アートとか文化芸術、芸術文化、芸術創造性などの説明がどこまで必要かというところは、この際、次は市長に提言ですから、ぼんと出して、あとは皆さんいろいろ想像してくださいといったほうがいいのかと思ったわけです。

そして、清水委員も書いていただいている絵、デザインは、あったほうがいいなと思います。ただ、私はできないので、どなたにというのは差しさわりがあるので言えないですけども、それは何かあったほうがわかりやすいだろうと思います。そこには、想像していただくことで、別に詳細は書かなくてもいいと思います。

私としては、そこまでです。

○南副委員長 済みません、返すようですけども、絵を描いて図形にしてしまうと、その図形のイメージが必ず先行されてしまいます。それが本質に合っているかどうかは、やはり、みんなで検討しないとどうしようもないことなのです。では、何となく誰かに絵を描いてもらいましょうと言っていろいろ構図をつくっているとして、それがここに書いてある文章と本質的にマッチするかどうかというと、意外に強引な要約になっている可能性がありますね。

逆に、絵を描くよりも、必要な用語、単語を並べてしまうということですね。あるいは、私たちの第3期の特徴的なセールスポイントになっているような部分を大きく書き出して、一つの大きなレジュメみたいなものがあるくらいのほうがむしろいいかもしれません。それらの関係がはっきり見えるのであれば、表にするになり矢印をつけるなり何なりがあってもいいと思います。まず、そういった用語をはっきり出してしまった方がいいのではないかと思います。

○北村委員長 先ほど、鈴木委員から、要約版というか、縮尺版というか、簡易版みたいなものが別立てであってもいいというお話がありました。とりあえず、太字にしているところだけ読んでいただければいいのかなということですね。

○富田委員 それはデザインの話で、さっきレジュメとおっしゃいましたけれども、それもデザインなので、何を優先されているのかということはテキストではなかなか見えづらい部分もあります。それは、後の問題になってきます。

僕は、要約することはすごく難しいような印象を持っています。この文章をさらに要約

するときに、まず、見出しになるようなものをどうするか。

○南副委員長 まず、この太字になっている文章の中から、どの単語を一番のポイントにするのか。そうすると、大きな文字からだんだん小さい文字、細い文字へと、少なくとももう一度大きさの列みたいなのができるのではないかと思います。それはそれで、デザイン的なおもしろみが出るかもしれません。あるいは、字をカラーにしてしまってもいいかもしれません。

○富田委員 そういうことはやれるかもしれないというところまでですね。

○山田委員 今、南副委員長のお話を伺いまして、ふだん僕も報告を受ける立場が多くて、絵にしてよと簡単に言ってしまっていたものですから、つい言ってしまいました。確かに、おっしゃるとおり、ここから全部を絵にすると、これに書いてあること、イコール、絵といいですか、説明するデザインというのは難しいだろうと思います。ですから、今、南副委員長と富田委員がおっしゃったような、ここから文字を出すというのは大事なことかと思えます。

それから、清水委員が北村委員長の文章を切っていったところで、北村委員長の文章は、これはこうだよねとわかりやすく書いていただいて膨らんでいるものですから、文言を入れかえているところについてはいいのかなと思っています。

あとは、私の先ほどの発言のもとになるのも、平成23年度、24年度の円卓会議からのメッセージというところを見ていると絵があったのですね。ただ、絵を見るときは、書いているものを見ないで、絵だけ見たら、ああ、そうかとなるけれども、絵と提言文を比べてみて、本当に整合性があるかどうかとなると、さっきのとおり難しいと思います。難しいですね。でも、時間もないですからね。中途半端でごめんなさい。

○北村委員長 今、いろいろと反すうするのですけれども、先ほど清水さんがテイストとおっしゃいましたが、私自身の好みもあります。私の文章は、割と息が長いのです。これは、かなりスマートにしたつもりですけれども、多分、一つの章なり節をまとめて読むのが大変なのだろうと思います。皆さんも、テレビを見るときに、コマーシャルは15秒以上たつと見られなくなるみたいな感じがあって、文章も余り長いと読み疲れてしまうというか、読み進められなくなってしまうのでしょうか。そういう意味で、もう少し段落を短くするか、細かな章に分けるとか、南副委員長が言われたように、大中小の文字で読み分けするのであれば、もう少し細かな章や節に分けることはできるかもしれないですね。あるいは、そうしたほうがいいのかもかもしれません。

伊委員、全体を通して何かございますか。

○伊委員 たくさんの議論や意見を本当にすごくよくまとめていると思います。私は、おもしろくと言ったらおかしいのですけれども、読ませていただきました。さっきも誰かおっしゃっていたのですけれども、これは誰が書いても9通りの報告書になると思うので、文章云々とか内容云々はこれでいいと私は思います。さっき山田委員がおっしゃったように、難しい部分は読んでいる人の想像にお任せするというので、そこら辺を全て気遣っ

ていくと、本当に時間がない中でこれを完成させられるかとなると、9人の意見をまとめるのはなかなか難しいので、私は北村委員長のこのままでいいと思います。

ただ、あえてつけ足せるのでしたら、先ほど尾崎委員もおっしゃったとおり3期目ですが、議論ばかりして形になっているものがあるかとなると見えない部分があります。ただ、札幌市は、私たちが思っている以上にすごく芸術に取り組んでいて、いろいろなところにもいろいろな企画が満ちあふれていて、いろいろなプロジェクトが進んでいたり、お祭りをやっているのですけれども、それが何となく当たり前になっていてぴんとこないのか何なのかかわからないのですが、市の中でそれが溶け込んでいることは間違いのないと思います。それをもっと市民レベルで意識を高めようと思うと、やはり、最後に書いてあったアートコンシェルジュの組織を提言しますというところだと思います。この内容云々は、議論していくとまた堂々めぐりというか、皆さんそれぞれいろいろな意見があって、それも全て正しい意見だと思いますので、それをまとめるのは、まず、これが発足して散らばった意見をきれいにまとめていければいいかなと思います。

普通、会社の会議では、このプロジェクトはいついつまでにどうするかという結論を出すために会議があるものなので、だらだらと第4期、第5期と続いても、結局、何も形になっていなければ意味がないので、私の個人的な意見としては、最後に市役所のほうにいついつまでにアートコンシェルジュをこういう組織で立ち上げたいのですが、イエスかノーかというところをもう少し具体的に踏み込んだらどうかと思います。ただ、アートコンシェルジュの組織がどういった形でなるかというところを私たちがもう少し考えて提案するということですね。例えば、すごく飛躍するかもしれませんが、NPO法人としてとか、私は予算をいつつけるというお役所的な問題がわからないので、今言ってすぐに組織立ったことをしましよということができるかもしれないから、別ボランティア団体を立ち上げて、アートの情報、案内人、アートコンシェルジュの仕掛け人団体をつくるのを広報さっぼろで募集するとか、はたまた、市民文化課長がリーダーになって、市役所の中でその組織をつくって外からボランティアからいろいろな意見をもらうとか、具体的に形になるような提言を一つ盛り込めればどうかと思いました。

ちょっと前にテレビでやっていたのですが、羽生君が金メダルをとったときに、市役所で市役所の担当の方の首に金メダルをかけてあげたそうです。羽生君が小さいころにスケートリンクがだめになってしまって練習場がない中で、そのときの市長が、市役所の担当の方に、リンクの再建をどうにかしろとダイレクトにプロジェクトを言い渡して、その人が地元企業などに投げかけたりして何とか再建したそうです。スピーディーといっても、1年半から2年ぐらいかかっているそうですが、市長が言えば意見が実現するのはスピーディーなのだなと思いました。

それから、全日空の機内誌で、改善してほしいところの意見を募集するのですが、毎月、機内誌の中で、具体的にこういう意見でここを改善しましたというものが必ず二つは出ているのです。そういった形で、会議をして話し合っているのです。では、3回目に来てよう

やく産業化からどうでこうでと内容をいろいろ話し合ってきたものを最終的に私たちの第3期でアートコンシェルジュがあるのがいいのではないかとまで提言したので、それを具体的にこういう形で人を集めてプロジェクトを動かしませんかまで提言できればいいというのが私個人の理想です。私は、それをやってみたいので、そういう団体があれば応募したいという気持ちで提言につけ加えていただければなというほのかな期待を話しました。

○北村委員長 何年か前に、お役所仕事が遅いので、地方の役所がすぐやる課をつくったという話がありましたね。

その後、私たちの提言がどういうふうに具体的に実現するのかということで、先ほど尾崎委員からもお話がありました。ただ、前回の終わりのところで、最後に余り時間がなくて議論できませんでしたし、尾崎委員は途中で退席されましたが、コンシェルジュの組織をどうするかと考えた場合に、具体的なことに踏み込むよりも、骨太な議論のほうが良いという尻切れトンボの議論になりました。そういうこともあったので、組織の問題については余り踏み込まずに書いたのです。

尾崎委員、いかがですか。

○尾崎委員 僕も、同じ思いがあるので、似たような意見になると思います。

最初に、この会議は、どこまでのどういう会議で、どういう位置づけなのか、皆さんはそれぞれある程度の思いは共通でありましょうし、札幌市としてはこういう集まりと条例の中で決めておりますね。個人的には、その思いに乗かって、さらに希望を上乗せして参加させてもらっているところがあるので、高いところを望んでしまうというのはご容赦ください。しかし、この会議自体はすごくいい議論ができていると思っているので、僕も最初に言ったように、3期目になって、例えば、2年後、4年後に、札幌の文化行政の転換期になっていくときに、こういうものをどう取り入れていってもらえるのかということとは、すごく気になりますし、今後も文化行政のことは注意して見ていこうと思いますし、僕がまた参加できるものがあれば参加していきたいと思っております。

○北村委員長 私が書いた文章の1ページの一番最後の行ですが、どんなテーマがあるか、皆さん1人10項目ぐらい挙げましょうというものを、A4判1枚の資料で大きく分けて四つぐらいになりますというふうに市役所のほうでまとめていただきました。あれは、長期的なものから短期的なものまで、ハード的なものからソフト的なもの、プライベートなものから割とパブリックなものまでいろいろありました。それが資料1ですが、あの資料はぜひ添付して、この後、札幌市において我々のアイデアがどういう形で実現しているのか、検証してみたいと思います。

先ほどのすぐやる課ではないですが、短期的にすぐやっていただけるものはどんどん手をつけて、南副委員長が言うように、例えばここを芸術回廊みたいにして歩道をつくるというようなドリームプランまでありましたので、夢あるものから身近なところまで、こういう議論があったというのは資料としてぜひ残していただきたいと思います。

○尾崎委員 2ページの頭の「札幌市におかれましては」以降を太字にするのはいかがで

しょうか。「札幌市におかれましては、機会あるごとにその実現可能性を追求してもらいたいと思っています。」。

○北村委員長 南副委員長、何かありますか。

○南副委員長 ちょっと話を戻してしまいますが、先ほどのアートコンシェルジュに対してです。

最後の「おわりに」の前にある媒介から越境へという用語は、すごく大きなポイントの一つではないかと思います。この文章を最後のところに持ってきているわけですが、これをもう少し見えるように正面に打ち出せる部分があってもいいのかなと思っていたのです。

その前に、二つの提言として、ブランド化とインフラ整備の説明があって、それを受ける形でそれらがどのような越境をつくり出して、それが施設間の交流の場とかリーダーシップスというものに結びつけていくのか、その辺で皆さんの意見をもう少し欲しいという気がしているのです。

○北村委員長 7ページの第5段落はどうでしょうか。

○富田委員 実は、リーダーシップという一極集中でこういう構造をつくるわけではないのですけれども、さっき僕が言ったアートに対する自律性のことだと思います。ある種、ちゃんとディレクションをしていないと、何でもいいわけではないということを押さえておく必要があるなということで、ここのリーダーシップは、そういう意味で札幌としてのおもしろいものをどんどん見出して行って、どういうふうに形にしていくかというところがディレクションの能力にかかわってきますから、これはかなり比重が大きいのではないかなというのは僕も同意できます。

○南副委員長 僕も、まさにそのとおりだと思います。さっきのブランド化という中には、ディレクションが絶対に必要です。あるいは、ディレクター的な要素ですね。札幌全体のアートをディレクトしていくようなものです。それがなくてブランド化はできないだろうと思っています。ですから、ここの部分は大きく出したいと思っていました。

では、それは具体的に誰がどういうふうにするというところまで提言する必要はないと思いますけれども、これが必要だよということは言う必要があると思います。

○北村委員長 ありがとうございます。

アートセンターがどういう風に機能するかというときに、トップに立つ人の人選が大事だというのは議論に出ているところです。

最後に、媒介から越境へという項目で、石川委員は市役所内の組織も縦割りではなくてアートの横断すべきだということをおっしゃっていましたが、まさに危惧するのは、4年後にできる複合施設が孤立してしまって、ほかの施設の中の一つになってしまうのは非常につまらないと思うところです。

清水委員の意見で、もう一つ、寛容性の問題がありました。寛容性について、何かご意見があればお願いします。

私の書いた文章では、3ページの2のところですか。多種多様なアートというのは寛容性

のレッスンであるという書き方をしているのですけれども、その寛容性をこういう形で提示することについては、何かご意見はありませんか。

非常に個人的なことを言うと、「寛容性のレッスン」という言葉が思い浮かんだときに、これはやったと思いました。

○南副委員長 僕も、おもしろいと思っています。

根本的にここで定義づけとしておっしゃっている清水委員の寛容性という用語と、ここで寛容性のレッスンと言っている用語との差はそんなにならないように思うのですけれども、どういうふうに分けしたほうがいいのか、逆に清水委員にお聞きしたいと思います。

○清水委員 私は、多分、前の会議でも先生に寛容性について質問しています。自分で出しておきながら、すんなり落ちないのです。うまくまとまらないので、代替案も出せないのです。

長くなりそうなので、ここはスルーでいきます。まだ、じっくりこなくて、うまくまとめられないのです。

○富田委員 例えば、森で会った会田誠さんから、まさに今のシャルリー・エブドの話までそうですけれども、表現の自由というのは、すごく閉塞感があるからこそそういうことがどんどん起きてくるのは実際に事実ですから、そこに対してどういう答えを出すかというか、札幌という都市がどういうあり方をするかというのも、実はアートで何か答えを出せるかもしれないという可能性を僕は感じています。その可能性に対して開いていくというのが寛容性だと僕は思っていて、そういう都市でありたいというある種の宣言ではないのですけれども、何か寛容でなければいけないというのは、逆に矛盾しているような気がするのです。

○南副委員長 まさに本質的なところで、アートというのは、ある意味で社会批判でもあるわけです。あるいは、社会のかがみでもあるわけです。全て、それもいいね、これもいいねで、拒絶もなく許容され続けてしまったときに、アートがエネルギーを持つことができるかという、これは実に難しいのです。

ですから、寛容性の問題は、寛容されれば全ていいのかというと、そうではなくて、そうではない状態から次の寛容の状態を認めさせる力をアートが持つことが大事です。そのアートが力を持つためにおいて、この寛容性のレッスンという言葉は悪い言葉ではないと思っています。

○北村委員長 批判的な態度がもとにあって、それに対して、私たちは批判されることも受け入れなければいけないのです。そして、批判する自由もあるわけです。

○富田委員 そうですね。これがこうでなければいけない、そういう風に決めてしまうことは、さっき言ったみたいにアートがどんどん変化していくし、もちろん、アートセンターのあり方もどんどん変化しなければいけないですし、そういう意味では、それを受け入れるというのも、ある種、寛容性になると思います。

○南副委員長 そこを受けとめる、あるいは受け入れるためのストレスです。そういった

社会的なストレス、あるいは、都市としてのストレスを持ち続けることがやはりアートを生み出す原動力になっていくわけです。その辺のやりとりが明確にできるという状態が実は寛容なのではないかと思えます。

○富田委員 この中では全く触れていないですが、今、札幌ではアートに対するクリティークという批評の力がまだまだなくて、いろいろな活動をされている方がいるのですが、それは誰が批評して位置付けていくのかというところがないと、やはり盛り上がっていきませんし、いい意味のコンペティティブな状態が生まれないということもあるので、それは両方が両輪で回っていくのがベストではないかと思えます。

○北村委員長 それは、先ほどから富田委員は、なし崩し的にアートが日常的に広がるのではなくて、ある程度のクオリティーを保たなければいけないというお話ですね。

6ページのコンシェルジュの⑥で、批評というのは一応入っているのです。アートセンターみたいなのがあれば何でもいいというわけではなく、批評性とか批判性みたいなものはどこかで担保しておかなければいけないと思っております。

○富田委員 そうですね。一人一人のアーティストに対する成長を促すためのものというよりも、もっと大きなフレームで、第三者的に文化芸術をどういうふうにするかという批評ももちろん必要になってきますね。アートセンターを運営していく中で、そういう風にしたくないいろいろな意味でなかなか成長していかない気がします。

○北村委員長 うまくまとまるかどうかわからないのですが、一つは、ブランド化とは一体どういうことなのかです。産業化とは違うけれども、南副委員長の言葉で言うと、ブランド化するには、何か明確な視点がなければいけないということです。さっぽろアートがどういうものなのかという明確な視点がなければいけないし、これをディレクションする人が必要だということがまず一つあると思えます。

○南副委員長 もう一つは、最後の越境という問題です。札幌市全体をアートとしてブランド化していくわけですから、当然、あるセクションだけがあるわけではないので、越境という問題は必ず入ると思えます。

○北村委員長 そういう問題が一つありますね。

それから、まさに円卓会議の議論の実質化ではありませんけれども、役割というか、ここで議論したことがどんな形で実現されるのかという実現可能性について、言うだけのこともかもしれませんが、何かしらを語るということでしょうか。

それから、書く書かないのところで、清水委員がご提案のリベラル・アーツのことを入れたほうがいいですか。清水委員が添削してくれたものの2ページのところで、「次項目とつなげるために、ここでリベラル・アーツの注釈を入れたい」とあります。

○南副委員長 これは、まさに、日常性の芸術化と委員長がおっしゃっていることのブランド化の中の一つの組み入れでいいのではないのでしょうか。

○北村委員長 とりたててリベラル・アーツという言葉を入れると、またややこしくなるかなという気がしますね。

○南副委員長 ですから、リベラル・アーツという言葉自体は、日常性の芸術化という文を出すことでいいのではないかと思っています。日常性の芸術化もブランド化の一つ、あるいは、市民が芸術、アートというブランドを持っていることに対するプライドを持つということと同じなわけですから、それもディレクションを持った明確な視点、越境したものであり、そして、日常性の芸術化、市民が芸術に対してブランド意識を持つことだと思います。それから、先ほど委員長がおっしゃったように、一流のアーティストが住めるまちである環境づくりということがブランド化を促していて、これらが実質化の一つの重要な要素だということではないかと思うのです。

○北村委員長 それでは、私の書いた文章の5ページの4. 1のところをそういうことをもう少し書き加えればいいでしょうか。ブランド化とはどういうものなのかを考えたときに、私たちの日常生活の身近にあって、私たちがここに住むことを誇りにできるようなものがたくさんあり、実際にアーティストたちがここで生活して作品を制作したり、さまざまな活動をしているということですね。

○南副委員長 要するに、文言の表にしていくときに、委員長が最初に創造都市さっぽろの実質化を出しているわけです。最初に、創造都市という定義づけ、札幌市における問題を踏まえておっしゃっているので、その部分は置いておいて、我々が考えている創造都市の範囲の中で二つの提言があると思うのです。

一つは、実質化するためには何が必要かというさっぽろアートのブランド化という問題です。ブランド化するためにはどういうことなのかといったときに、日常性の芸術化であり、ディレクションを持った明確な視点を札幌市で持ち、札幌市全体がアートとなるから、当然、セクションがそれぞればらばらになってはだめなわけで、越境的なものが必要だということです。そして、アーティストが生活できる都市空間が必要です。もしかしたら、これに寛容性という意味が関係してくるのではないかと思うのです。

そういったことで、これらはブランド化イコール産業化ではないのだというような単純な一つの枠組みであり、アートコンシェルジュというもう一つのインフォメーションの整備との二つについて、4. 1と4. 2を表にして、その上の実質化の方法論というような感じで単純化することはできると思いましたがけれども、いかがでしょうか。

○北村委員長 このところの記録を後でお送りいただければと思います。

それから、もう一つだけ気になったのは、今の創造都市さっぽろのことです。

4ページのメディアアートについて、清水委員が難しいと言ったマクルーハンのこととかをぐだぐだ書いていますけれども、ここは要らないですか。

○富田委員 やはり、神の概念とか靈感などいろいろなアートの的なものが出てくるので、そこはもっと平易でもいいと思います。

○北村委員長 どこを平易にすればいいですか。

○富田委員 メディア研究の泰斗、マクルーハンというのは、引用ですね。

○北村委員長 なぜマクルーハンを出したかということ、石川委員のアートコンシェルジュ

がメディアであるということに対して、たしか清水委員がすごく反応して、マクルーハンのことをおっしゃったように僕は記憶しているのですが、覚えていませんか。

メディアというのは、身体の機能の拡張であるということを清水さんがおっしゃって、マクルーハンのことだなと思ったのです。

○清水委員 私も、大学4年生までマクルーハンのことを知らなかったです。大学院で初めて聞いた単語なので、一般的ではないのかなと思います。メディア研究の常識だろうけれども、一般の人にわかりやすく、メディアによって人間が逆に影響を受けるということを見たかもしれません。リベラル・アーツもそうですけれども、一般的な大学4年生までだったら余り聞くチャンスがない単語が多かったのかなと私も思いました。ただ、だから入れないほうがいいというわけではないと思うのです。ここで知ってもらおうというものがあるので、決してだめだとは思わないですが、メディアアーツをもう少しさらっという意見もありましたね。

○北村委員長 論理の展開からすると、先ほど南副委員長がおっしゃったように、4ページの「具体的方策をさまざまに検討しました」というチェックになっているところから、直接、二つの提言に飛んだほうが見通しはいいですね。

それでは、ここは全部削除しましょう。

○富田委員 削除してしまうのですか。これは、僕も個人的には好きな話です。

やはり、気をつけないといけないのは、僕らはアートばかりを考えているので、そこら辺の目線は必要かなと振り返りながらやっているところです。

○南副委員長 単純な用語を並べるのは、先ほど鈴木委員がおっしゃったように、削除でもいいのかなと思います。ただ、文章としてきちんと残すということはあってもいいと思います。ただ、順番をどうするかは別問題です。

○富田委員 これは、ビデオレコーダーを指すかという清水委員の疑問は変わりないですか。

○清水委員 写真というメディアは映像の記録を可能にした、過去の絵や画像、過去の風景や出来事が残るということで、記憶です。ビデオというメディアによって時間を編集するというのはどういう意味なのか、私はつかみかねたのです。家のテレビにビデオがついたから、好きなときに好きなものを見られるという意味の時間なのか、時間の編集だから、編集してしまうということですね。写真は一瞬だけれども、ビデオは動画で動きのあるものの時間を入れかえたり間を切ったりという意味なのか。

○北村委員長 別に、そんなに深い意味はないです。むしろ大事なのは編集という言葉かなと私は思っています。

だから、私自身は、この2段落はなくても全く構わないのです。むしろ、言葉足らずな気がするので、書くのだったら、もう少しちゃんと書けと思います。

○尾崎委員 「メディアアーツによって私たちに何がもたされるかが問題なのです」を受けての後半の文章で、僕は、個人的には逆にこれがあってすっきりしたポイントではあり

ました。

○北村委員長 結論はペンディングにしたいと思います。

ほかには何かありますか。

富田委員が言った「アートのじりつ性」みたいなものは、ここでブランド化でまとめればいいですね。

○富田委員 両輪で行くということですね。

○北村委員長 「じりつ」の「りつ」は、「立」ですか、「律」ですか。

○富田委員 余り好きな言葉ではないのですが、「律」です。

○北村委員長 これも、僕らの分野だと、自律化などと言うと、すぐにバツテンが出るというか、チェックが入ります。おまえは20世紀頭かとか19世紀かと言われてしまうのです。

○富田委員 もう少しメディアにこだわってもいいですか。

メディアがブラックボックス化するというのもそうですけれども、逆に、メディアに操作されるというか、振り回されるという状況こそ危険だなと僕は思うのです。

メディアがブラックボックス化するというのをもう少し説明していただいてもよろしいですか。

○北村委員長 別に深く考えているわけではないのですが、創造都市さっぽろのネットワークに札幌市がメディアアーツの分野で加盟しましたが、それがどういうものなのか、私たちはなかなか情報がないです。どこで創造都市さっぽろをやっているのか、市役所だとか、市長政策室かどこかでやっているのでしょうか、その旗振りはどういう形で私たちのところに風が届いていくのか、少なくとも私は実感していないということです。

○富田委員 わかりました。このメディアに操作されてしまうような危険性をはらんでいるしみたいなことです。

○石川委員 基本的な質問ですが、メディアがブラックボックス化しないようにということで、ここで指す「メディア」は何のメディアですか。

○北村委員長 情報の媒体素です。

○石川委員 それは、札幌市が発行する情報媒体ということですか。

○北村委員長 必ずしも広報さっぽろということではないです。

○石川委員 札幌が創造都市としてつくるメディアということですか。

○北村委員長 余り深く考えていませんでした。

石川委員は何かお考えがありますか。

○石川委員 私も、ここでメディアと出てくると何のメディアなのかというのはありました。

○北村委員長 情報の操作主体のようなものですね。

○石川委員 これは札幌の話なので、結局、ここで指すメディアは、札幌市が発信していくということですね。

○南副委員長 札幌がメディアアーツを推進していくということに関しての推進方向云々がブラックボックス化しないということをおっしゃっていると思います。

○石川委員 そのほうがわかりやすいという気がします。メディアというと、何のメディアを指すのかわからなかったです。

○北村委員長 そのとおりですね。

この4ページの後半はとりましょう。

それから、アートコンシェルジュに関しては、今、石川委員からももう少しネットワーク的な側面を有機体的な側面を強調したほうがいとありました。これは、最初のアートコンシェルジュの性格づけみたいなところですね。

○石川委員 それに関しては、次のページのある媒介から越境へということにも関係していると思いますけれども、さっぽろアート・コンシェルジュをつくるというのは、個人的に一番思い入れもありますし、実現したらうれしいなというのがすごくあるのです。単に一部署をつくり出すということではなくて、委員長が書かれたような媒介から越境へというところも含めた今までにない組織というところを強調していただければと思います。

○北村委員長 5節のところですね。

南副委員長、これは最後ではなくて前のほうに持ってきたほうがいいですか。

○南副委員長 僕は、越境に関してはまとめのところで構わないと思いますし、最初に出してきてもいいと思います。やはり、最後のほうが文章としてまとめやすくありませんか。

それから、コンシェルジュの性格づけ的な問題で、前に面白さ第一主義という言葉がありましたね。それは、発見・驚き・泣き・笑い云々の言葉に集約されていたような気がするけれども、それはどこに書いてあったか、今、一生懸命探しています。

○北村委員長 その言葉は、6ページの①に出ています。

○南副委員長 ブランド化のほうですね。

○北村委員長 タイトルにもありますが、清水委員の添削のとおり、これも削ったほうがいいかなと思っております。

○南副委員長 何となく、面白さ第一主義という言葉が出てきたときに、それがコンシェルジュとかかかっていたような気がしますので、コンシェルジュの性格、方向性みたいなものに面白さ第一主義的な発想があるのだということを加えてもいいのかなと思いました。

ただ、編集のところにありますね。逆に、このキャッチフレーズのところはもっと出していいのかなと思いました。

結構です。ありがとうございます。

○北村委員長 「『創造都市さっぽろ』の実質化」というタイトルはどうでしょうか。

○富田委員 タイトルとして落ちないのですけれども、横断的であるとか、越境という言葉はかなり大きいのではないかなと思うので、何らかの形でタイトルに組み込めたらいいなと思います。いかがでしょうか。

○北村委員長 ただ、越境というものを最後に出してきたのですが、そのことについてこ

こでまとめて議論したことがないので、それをタイトルにまで持っていくのはためらわれたのです。

○富田委員 そうですね。これまで自分たちの周りに深く、隣にアートがある状況というか、浸透している状況こそすばらしいということですね。

○南副委員長 タイトルは、多少抽象的になってしまうかもしれないけれども、せっかくこういう言葉があるのだから、この言葉そのものを使ってしまって、創造都市さっぽろの実質化から面白さ第一主義へというような、わけがわからないぞというタイトルでもいいのかもかもしれません。

○石川委員 個人的には、僕はタイトルがわかりやすいほうがいいので、どうやって入れるかはわかりませんが、結果的にある二つの提言、アートのブランド化とアートコンシェルジュについての提案みたいなことがあったらいいかなと思っています。

○清水委員 私も、今、石川委員のように考えていて、創造都市さっぽろの実質化のための二つの提言ですね。札幌アートのブランド化とアートコンシェルジュの創立という感じを思いついていました。

○山田委員 私は、面白さ第一主義という言葉が入って、文章の中に二つの提言があったほうが良いと思います。あくまでも個人的な意見ですが、今回の提言は何ですか、面白さ第一主義だよと一発で言って、あとは細かい実際の提言はと言ったほうが落ちやすいと思いました。そして、今までの話し合いの中では、まず、札幌は創造都市さっぽろであるという、それが190万人市民の隅々まで伝わっているかどうかはさて置き、そこを札幌市として目指しているの、話し合いの中も実質化をどうやっていくかということがあったと思いますので、これはあっていいだろうと思いました。そして、面白さ第一主義や日常をアートとともにというやわらかい言葉がここにあると、キャッチフレーズとしていいかなと私は思います。

○北村委員長 山田委員、具体的にどうすればいいですか。

○山田委員 私は、「創造都市さっぽろ」の実質化で、並べ方としては、次に面白さ第一主義で、波線を入れて日常をアートともに。今迷っているのは、実質化の後を中黒にしたらいいか、どうしたらいいか迷っています。まずは、この三つの言葉があったらいいかなと思いました。あとは、見た目ですね。

○北村委員長 ほかの方はどうですか。

○伊委員 私も、トップに面白さ第一主義が来たほうがキャッチーで読みやすいと思いました。例えば、面白さ第一主義の後に創造都市さっぽろの実現化のための二つの提言とか、そのような感じでサブタイトルを持ってくるなどですね。意見が割れまくったところで、もっと割ってしまって済みません。

○北村委員長 また自分で自分を批判する話になるのですが、これで全部をまとめるのはちょっと軽いというか、そこまでの重みをもって考えた言葉ではないです。キャッチーであるというのは嬉しいですけども、どうでしょうか。

○尾崎委員 僕も、委員長の意見に賛成派です。面白さ第一主義は、受け入れやすいのはすごく理解できますが、あえてここに持ってくる言葉かなと思います。

○清水委員 でも、看板ですよ。このタイトルを見て、読むか読まないか決める人もいるかもしれないので、難しいですね。

○南副委員長 前にいただいたのは、平成20年度文化芸術円卓会議からのメッセージとしかなくて、その後、タイトルがぽんとあるわけではなくて、こんな風になっています。

円卓会議が提案しますという絵柄はありますけれども、いきなり、初めになぜアートセンターかというのがあります。

わざわざキャッチーなものが必要かということ、そうでもないのかなという気がします。ただ、ここで、市民生活において芸術は必要なのだろうかという基本的命題に対してという言い方をしているので、単純に創造都市さっぽろの実質化ということを基本命題としてスタートしたのだと考えて、それを語るところからでもいいのかなという気はします。

○北村委員長 では、あえてタイトルは凝らなくていいということですか。

○石川委員 個人的には、タイトルに第一主義が入るか入らないかというのはどちらでもいいのですが、二つの提言というのは重要なものだと思っていて、なおかつ、文章の内容としても非常に具体的なものなので、さっぽろアートのブランド化とアートコンシェルジュ組織化の提案みたいなものは、小さくてもあったほうがいいかなと思っています。

○北村委員長 難しいですね。

○尾崎委員 ここは、みんなそれぞれ意見をこの場で言った上で、最終的には委員長一任でもよろしいのではないのでしょうか。皆さん、言いたいことは言ったと思います。

○北村委員長 ありがとうございます。

では、ほかに何かことは入れたりとか削ったりというところがありますか。

前だったら円卓会議からのメッセージですが、メッセージの向け手は市民の方々にという文章にしないでほしいと思います。その辺の語尾とか主語は直させてください。

寛容性に関して、先ほどの意見で、このままでそれほど大きく変えずにいいと判断させていただいてよろしいですか。

(「異議なし」と発言する者あり)

○北村委員長 ありがとうございます。

ほかに、皆さんから、この点はというところがありますか。

(「なし」と発言する者あり)

○北村委員長 もう一つは、これまでの議論を踏まえながら、最終の報告書は、特にブランド化の問題についてもう少し記述をふやしたいと思いますが、それをまた私がつくるのでしょうか。

○南副委員長 お願いいたします。

○北村委員長 今後、日程的にはどういうスケジュールで進めたらいいのか、市から説明をいただけますか。

○事務局（高橋調整担当係長） 今日開催日程確認表をいただきますけれども、そちらを見て、市長への報告の日程を調整させていただきたいと考えております。その日程次第というところもありますが、基本的には、きょうから1週間前後である程度の形をつくっていただきたいと思います。それを最終的に皆さんに一度フィードバックしたもので、本当に1日か2日になるかもしれませんが、何かあればご意見をいただいて、それを北村委員長にお戻しして、最終的な報告書として今月中に固めるようなスケジュールリングになってくるかと思えます。

あわせて、きょう皆様から日程確認表をいただきますけれども、夜間も書いているのですが、以前お話ししたとおり、市長に報告する形になるので、基本的には業務時間中の9時から17時の間になると思われま。皆さん、お忙しい方ばかりなので、もしかすると日中は厳しいという方も中にはいらっしゃるかもしれません。できるだけ出席者が多い日を考えておりますけれども、最悪、市長に言いたい趣旨を事前に私にいただければ、私から委員長、副委員長にお渡ししますので、それを委員長、副委員長から発表していただくという形で、日程を調整させていただきたいと思えます。

もし皆さんの日程や市長の日程を考えて、どうしても2月が厳しいとなると、2月下旬は大学の入試で委員長と副委員長はほとんど厳しくなってきますので、3月ということで日程を再調整させていただくこともあり得るかもしれません。そこは、今日皆さんからいただいた日程を確認した後、改めてメールなり何なりで調整させていただきたいと思えます。

以上です。

○北村委員長 きょうは13日ですね。

1週間は厳しいので、最悪、23日ぐらいまででも大丈夫でしょうか。10日ほどいただけますでしょうか。

このことについて、先ほど、南副委員長がとてもきれいにおまとめいただいたので、その部分だけでも原稿をいただけると嬉しいです。

○事務局（加茂市民文化課長） 今日は、皆さんからご意見が出ましたので、先生にお作りいただいた後、皆さんにご覧いただいてというフィードバックの時間が十分にとれるかどうかわかりませんので、ある程度、委員長にご一任いただけるといいかと思えますが、皆様、いかがでしょうか。

（「異議なし」と発言する者あり）

○事務局（加茂市民文化課長） よろしくお願ひします。

○北村委員長 それでは、7回にわたって、皆さんから非常に活発なご意見をいただきました。こういう議論が単なる議論のための議論ではなくて、まさにこの会議が実質的なものになっていただくことを切に願っております。皆さん、大変ありがとうございました。拙い委員長でしたけれども、皆さんのおかげで何とか形になりそうです。半熟卵でこのまま潰れてしまうかもしれませんが、なるべく固まるようにしたいと思いますので、

もう少しお時間を下さい。

皆さん、どうもありがとうございました。

事務局にお戻しします。

○事務局（加茂市民文化課長） 足かけ2年間にわたりまして、札幌市の文化行政に関しまして、皆さんに真摯にご議論いただきました。まことにありがとうございました。

今日は、この円卓会議は何とためにやるのかという根本的なご提言をいただきました。行政的にこういうものかというものは幾らでもあるのですが、我々としても、北村委員長から、それぞれ10個出してくださいということで表にしましたけれども、あれを全部一個一個進捗管理するというのはなかなか厳しいところがあります。

先ほど、中期計画にこれをどう反映させるかという話がありましたけれども、我々は、中期計画をつくる時に、別に検討委員会を開いております。そして、2期のメンバーと意見交換をしたという経緯もあります。では、この円卓会議の位置付けとは何なのかというところもあるのですが、我々としては、こういうところでいろいろとお話を聞くということが、既に日常の中で、これはこうしていったらいいねという判断の中で、すごく記憶に残っているところがあります。100、200と出していただいたもの全部を網羅して実現するのはなかなか難しいかもしれませんが、アートコンシェルジュをこういう形でやっていったらいいのではないかという骨太のところは、アートセンターの検討の中で絶対にベースにして議論を進めていくことをお約束したいと思います。

この会議以外でも、これからさまざまな場面で札幌市の文化行政に対して皆さんからいろいろのご意見、ご指導、ご鞭撻をいただければと思っております。

3. 閉 会

○事務局（加茂市民文化課長） それでは、以上をもちまして、第3期円卓会議の7回目の会議を終了いたします。

本日は、まことにありがとうございました。

以 上